

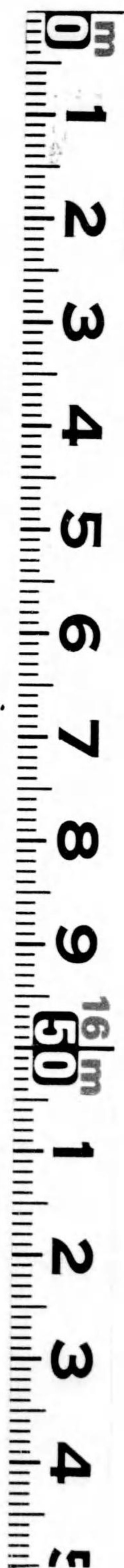
特100

228

三月十三日印刷  
一月十五日發行

# 從軍思出之記

郎 次 善 本 紀



# 始



持 157  
228



大正  
12. 3. 20  
内交

自注  
勇武性優矣望凝  
為國能養之又鍊  
之可以固邦極

吉野元



## 緒言

皇謨茲に二千五百八十三年國運は隆々として朝日の昇る勢ひである即ち天壤無窮の皇運と愛國純忠の一血團によりて今日の成果を收め得た而して開闢以來我等の血統を一貫せる大和魂と日本固有の武士道によつて支那を膺ち露西亞を懲し獨逸を牽制して東洋永遠の平和を確立し得た是れ即ち我國今日あるを致す所以のものでありませう。

然るに近時思想は頗る變遷を來し我國の基礎である大和魂は薄らぎ武士道は間却される様になりつゝありはしないかと疑はれる一たび軍備制限問題が起るや直に軍備に大削減を要すと説き國防の充實を要する際に於て軍備不必要論を唱へる輩あるは遺憾の極みである

國防の充實即ち軍備を完からしむるは軍の強きを恃んで戰を好むものでない國防の充實は外侮を禦ぐにある、世人往々戰爭の悲惨を聯想して軍備の不必要を説くものあるは美に懲りて裁を吹くの類である國防の充實は敢て侵略的軍備に非ずして對等の利權運用をなし而かも不權衡ならざる外交を爲し得る唯一のものである若し軍備に缺くるところあらんか直に強きに乗せられて屈辱を忍ばねばならぬ様になりそして怨恨となり不和となり戰爭となるのである、國防の充實は常に戰爭に際して勝利を得るのみならず戰爭を未然に禦ぐべき平和の基調となる平和を得んと欲せば平和會議も軍備制限も役立たず只あるものは國防の充實であるそこで淺薄な私は一國民として華盛頓會議に論及して見よう

西歷一九二一年十一月に開かれた米國華盛頓會議即ち軍備制限會

議は何を物語つてゐるであらうが軍備制限は世界永遠の平和だと安心が出来るであらうか甚だ心元ないかのベルサイユの平和會議を脱退した合衆國が英佛伊の三國を誘ふて日本に當つたのは何が爲であらうか勿論經濟的方面に重きを置いたことは否定することは出来ないが靜に考へて見ると時期を捉へた方策的名案であるといひ得る提唱者の目的は日英同盟を廢棄せしむるのがその一であり我國の軍備を牽制するのがその二である經濟上の問題は其三に屬するものであらう

世界第一の富國である合衆國が經濟上より起した軍備制限とはどうしても受取れない、近々五十年間に於ける我國の進展は彼の國にとつて非常な脅威となり野望を充たすことの出来ないのみならず惡夢に襲はれる原因となつたのである世界戰亂に乗じて獨り舞臺を演

じたのも彼の國であつた斯の如くにして我國を獸圈内に置いて世界各國を牽制しやうといふ遠由は歴然たるものである先づ露獨は戰敗國として再舉の見込なく英佛伊亦疲勞して餘力なく就中我國を屬目するの事理明かにして軍備制限問題起る所以のもの實に此處に存するものではなからうか兎角侵略的軍備充實を全廢しようとするのは吾人の饒望するところであつて人類の幸福である然し現今の如き實際關係に於て互に他國の軍備を窺測して間隙を見出さんとしてゐる或は打算的政策を講じつゝある状態では、何はさて置き國防充實を期すべきである。

次て私が常に遺憾に堪へられないのは軍備縮少の聲によつて軍人が社會より疎せらるる様になりつゝあることである國防の充實を要するの秋に際し左様な感じを持つてゐる社會の人を酷評したいかの日

清戰役を知れりや少くとも日露大戰は今尙新しき記憶に存じてゐる筈である、國民は擧つて軍人を慰めその勞を犒ひ感謝したのである、其當時を追想せば感慨無量であらねばならぬ曠漠たる滿洲の野に百萬の大軍が策動したではないか日本海々戰を想起して如何なる感じが起るだらう異國の土と化した數萬の戰死者や大海の藻屑と消えた幾萬の勇士を思へば吾人は忘るゝことの出来ない痛恨事であらねばならぬ、嗚呼幾十萬の英靈は護國の神となつた永久不滅の神靈に朝夕禮拜を怠ることがないが、吾人は東都の靖國神社を遙拜して居るか、今日の日本國を築き揚げて吾人に幸福を得せしめたのは幾十萬の神靈である而して現在を護衛しつゝあるものは軍人である吾人の保護者であるべき軍人を疎することは犠牲となつた英靈に對し不敬となる而已ならず己れの身邊に危害の迫りつゝあるを知らないも

のであると云ひ得る軍人に對して感謝を怠り依頼せず軍人を疎すものは、喉元通れば熱さ忘るゝといふ鈍輩であらう

私は近頃の世態を直觀して世界の何處に眞の意味の平和があらう？ 幻覺的平和であるといふことを想起しては、軍備縮少が世界永遠の平和だと夢想し安心して居る多くの人々に「治に居て亂を忘れず」といふ千古の金言を注入したい露西亞や支那は現在あの通りであるから今十年や二十年は先づ他から侵略されるやうな憂ひは無いが何日如何なる事變が突發的に興るかも知れない平和と人か思ふて居る中に大禍亂が起るのであるから其時の用意が必要である、國民は平和に酔ふて一方肝腎なことを忘れてはならない、私は此意味に於て國防充實を主張して止まぬと共に軍人に對し滿腔の感謝の意を表し居るものであります

私は元陸軍の一兵卒でありましたが今は廢兵となり兵籍から除かれたのでありますが過去に於て國家社會の爲に微力を盡し得たのを喜びとして今も尙感激感謝の日送りをなしつつあるものであります茲に古い従軍日誌を辿りつゝ拙ない筆を運びましたが當時の思出を皆様に笑つて頂きませう。

紀 本 善 治 郎

### 從軍思出之記

大正二年の冬十二月雪混りの寒風と友人とに送られて深山重砲兵  
聯隊に入隊して紀淡海峡のあの盆景に見る様な美しい姿を眺めつゝ  
毎日教練される身となつた、乗馬演習に十五珊砲や二十四珊加農、  
二十八珊溜彈砲の繰砲に或時は小銃射撃と總ての教練も進んで翌年  
の三月に第一期の檢閲暑さの厳しい七月に泉州信太山の第二期檢閲  
も終へ深山砲臺の實彈射撃をも體驗し得て漸やく一通りの教育を授  
けられた譯である、それから間の無い八月の初頃になつて毎日々々  
歐洲戰亂と動員の話が持ち出され酒保の新聞掲示板はいつも人山を  
築いてゐた青島攻略の事が話題の中心となり出して聯隊内では皆が  
揃つて一日も早く動員あれかしと待ちわびるのだつた



## 動員下令

八月十六日

晝食後の休憩時間に將校集會所より將校が聯隊本部へ駆けつける  
兵舎内では今に何事か起り來らんと緊張してゐる一時間位たつたと  
思ふ頃小隊長は滿面に笑を湛へつゝ中隊に歸つて來た舎内は騒然た  
る有様である何處から起つたか動員!!動員!!續いて萬歳々々の聲起  
り暫時鳴りも止まぬ有様であつた

各班では非常に騒ぎ出してゐたが私は何を聞く猶豫もなく衛戍衛  
兵上番として同年兵の釣田君と二人二三年兵に混つて數町離れた山  
中の火藥庫の歩哨に立つた夜は更け行きて四邊は黒を流した様に眞  
暗である夏の夜と、いびながら時おり吹く一陣の風身を引き締める  
二時間交代の休息時間も眠氣もさゝず只思ひは歩哨任務に就てゐる  
ことゝ動員||出征||奮戦と、それからそれへと聯想する而已で外に

何の感じも浮ばない午後四時の交代時間までは永い事だ營内は今頃  
ごろしてゐるだらう只管夜の明るのを待つた計らずも午前八時に臨  
時交代として上番衛兵が到着した直ちに申送りをなし歸營した營内  
は大騒動である支給品返納の命ありて身には二装用の黒服一着と劍  
どのみ其他の支給品一齊を返納した

八月十八日

加太町に宿營

舍主 宮崎鶴之助

こゝに於て非常に氣毒に思つたのは復習兵である八月初に三週間  
復習、勤務で入隊して酷しい暑さの中を現役兵と共に演習を終へ今  
二三日で歸郷する筈の先輩は動員下令と共に從軍せなければならな  
かつた現役兵こそ同じ働くなら戦地にと血の湧く思ひに喜んで居る  
が後備兵の妻子ある身に不意打ちを喰つたことは實際のところ同情

せざるを得ない何んと言つても仕方がない、さあ行きませう今日からは宿舍生活だ籠の鳥を放つた様なもの嬉しいことだと勇み勇んで加太町に引遷つた此の日の正午頃だと思ふ父と父の友人とが態々訪ねて呉れた僅か二三十分の面會時間に何を話したか記憶がない

八月十九日

戦備を急ぐ

あの溪間に等しいくの字形の廣からぬ加太練兵場では多勢の人夫の手に依り晝夜兼行厩舎倉庫其他の建物を急がれてゐる練兵場脇の加太ステーションでは軍需品の荷下しに多忙を極められ動員を聞き付けて故郷より来る父兄やらで雑踏を呈してゐた

八月二十日

應召員入隊

赤襷をかけて手に召集令状を握りつゝ多くの人に送られて来る先輩は早朝より陸續プラットから吐き出される、私は練兵場西端にあ

る加太小學校内にて應召員受領に終日其助手を勤めてゐた二十一日は聯隊本部に輓馬具や其他の兵器を受領した

八月二十三日宣戰の召勅下る（午後五時五十分）

八月二十四日

徵發馬受領

晝食後萩原上等兵に指揮されて輕便鐵道に依り和歌山市驛に至る、構内は軍需品で山の如く積まれてゐる各地より輸送し来る軍馬は引切りなしに下されてゐたが吾中隊に受領すべき徵發馬は午後十時頃であつた雨は頻りと降り出したか雨具の用意がない四邊は眞の暗夜であるのに裸馬に蓆一枚で三里餘の道を行かねばならぬ、進むにつれて道がだんく悪く高踏して歩けないので仕方なく尻の痛さを忍んで馬の脊に縋ることゝした夏の夜といひながら身體がびつしよりに濡れ鼠になつてゐては身震ひせずには居られないこれ位のことゝ

自分で自分を勵まして進む一行中には蓆の用意も無くどぼくと鼻を引く者もあつた眞夜中頃漸く加太練兵場に着した馬を厩舎に繋いで手入もそこくに馬糧を與へて宿舎に歸る

八月二十八日

宿營移轉

舍主 利光小三郎

編成に因つて獨立第十八師團野戰重砲兵第三聯隊第五中隊に屬する事となり中隊長は異動なく慈愛深き小林茂大尉殿であつたことは私共の幸福であると戰友と共に話合つた宿舎を移轉して中隊本部に日夜多忙を極むることゝなつた此時より觀測手である私は觀測小隊長である井後中尉殿の從卒を兼ねるの役を申付けられた

九月一日

軍裝検査

かくて二旬を経て戰備完了を告げた加太練兵場に整列なし師團長

閣下の嚴正なる軍裝検査を受け續いて閣下の仁慈なる訓示を受く

九月拾日

加太町を後に

殘んの暑さ身を焼く如く酷熱爐中に在るが如き此の日幾多の人に別れを告げ幾百の人に見送られ住みなれし加太町を出發す時午前七時半、私は編成に因つて觀測小隊にあつて一番觀測手（徒歩）の任務を帶ぶることゝなつた過ぎ行く村々萬歳の聲絶えず和歌山市民の歡送迎を受け中村に於て晝食して正午より孝子峠を越える深日村に小憩にして進む炎威に熱射されたる人馬共に、疲勞し弱き者は携帶品を車輛に結び付けてゐた、一時間に水筒を二三回も倒にした急ぎ山道を過ぎ淡の輪に着すかくて前後を打見やれば徒步者には一人として強壯な者なし砲廠を現位置に定められ此處より拾餘町隔つた海岸の松林内に馬繋場の設備をすることゝなつた觀測小隊で自分一人

だつた杭と柵とを携へて馬繋場に至り漸やく設備を終へた、そこで  
 氣がゆるんだか立つてゐることは出来なかつた乗馬挽馬の來るに間  
 もあるので松影の涼しい處に轉んだ其處へ駈けつけた或る喇叭手は  
 私に向つて「獐いやつだ」と呵りつけた私は黙つて居た心の裡では  
 譯のわからない者だ、己れは乗馬であつて疲れてゐなくとも徒歩者  
 の疲労は判りさうなものだ、私が「する」くば一人で此處へ來やせ  
 ない身體のつゞく限り働いて居るのだと此時ばかりは忿悶に堪えな  
 かつた。しかし口答はせずに堪へてゐた、彼の立去つた後に六十餘  
 りと見ゆる老爺が水を擔つて來て呉れた冷やかなさうして清らかな  
 井戸水を腹の大きな位ひ呑んだそれで漸やく蘇生の思ひがした親  
 切な老爺だと感謝したこの時のことは今に忘れられないあの老爺は  
 今頃は此世に居らないのだらう何處の人とも判らないが今尙感謝し

てゐる疲労は癒る暫しすると馬は疲れてやつて來た手入も十分に糧  
 付もなし宿舎割を得て淡の輪郵便局に宿泊す

九月十一日

友人の面會

午前六時出發戸毎に見送る村人に勵まされ『勇敢なる兵士』の軍  
 歌を歌ひつゝ知らずくゝの裡に貝塚町に入る綺麗に軒を並べた街道  
 筋を東に折れ貝塚停車場前の空地に着砲廠馬繋場を定められてある  
 のを幸として例により手入を終へて宿舎に入る殊に盛宴を以てせら  
 れ恐縮した夕暮れ方岸和田なる舊友松村顯義君が訪ねて呉れた友が  
 散歩にと誘ふまゝに舍主に斷りして表へ出た腕車を頼んで岸和田に  
 至る友の厚意で或る茶亭に憩ひ種々と語り合つた厚意を謝して辭去  
 し足を早めて宿舎に歸る時に午後十時半

九月十二日

貝塚より大阪迄

午前六時出發す暑さは尙も激しいされど出征奮戦と思はゞ苦痛も何處へやら大津、鳳も過ぎ水泳に濱寺といふ景色のよい公園に晝食することゝなつた、この暑いのに吾れゝゝ出征軍人を慰問せんと市の婦人會員其他の團體が出張してゐて氷、仁丹、煙草、紙等を與へらる正午には堺も過ぎ住吉神社も遙に拜し天下茶屋も經て天王寺公園前を下寺町松屋町に向ひ内久寶寺町を東に折れ大阪城東練兵場に午後二時半着す思ふに十日加太出發以來過ぎし幾千の軒場に翻るへる日章旗あり戸毎に用意の飲用水また幾萬人の歡送迎の聲願ふだに涙がこぼるゝのだつた感謝せずには居られない愈々自己の責務の重大なるを感ずるのであつた練兵場南端に友人知己の面會を得たるも夜を約して宿舎なる伏見町二丁目野田小七方に至る、小隊長の歸りを待ち外出書を得て一ヶ年振りに懐しき我家に歸つた友人知己は送

別の意を表して呉れる一同の顔を見ては何を話す言葉も出なかつた夜の更くる迄かはるゝ訪ねて呉れる翌朝の任務を思ひ出しては一眠りと蚊張りに潜りぬ明くれば十四日早く起き出でゝ一同に別れを告げ宿舎に歸り直に井後小隊長宅に至り行李の荷物を用意して築港に至る一方中隊では早朝より城東練兵場を發し築港棧橋附近金庫脇に總ての搬送を終へ馬繫場を整へて乗船準備怠りなくなされてゐた

九月十四日

乗 船

末明より御用船土用丸に乗船を開始して午後の三時に全部の積込みを終へ大迫師團長閣下の告別の辭に涙を浮べて萬歳三唱なし乗船出帆に間もあるので甲板上に居て他船積込の状況やら幾萬の見送る人の面を次から次へと眺めてゐた後より呼ぶ聲に振り向けば井後小隊長である小隊長は蝦蟇口がまぐちより五圓紙幣を取り出してサイダー一打

と命せられたので早速下船して軍車通りに沿ふて行と計らずも父に  
 バツタリ出合つた此時の感情は筆では書けない家で別れを告げし時  
 に見送りを断つて置いたが父は他所ながらも見送るべく来て呉れた  
 のであつた父は酒屋でサイダーを買つてゐる間も側に居て呉れた『  
 もう歸つて下さい御機嫌よう』一二言右と左に別れ乗船した此日友  
 人平井橋三郎君も見送つて呉れた、船は直に出帆の豫定であつたが  
 風浪激しく見合すことゝなつたのである

九月十五日

築港出帆

潮風そよ／＼と吹いては身を引きしめる汽笛の音激しく右に左に  
 行き交ふ汽艇あり夜の明けたばかりに艦舟を漕ぐ舟子ありて流石は  
 大阪の大立關だ水運の便水の町の稱呼も斯くありなんと感ずるの  
 であつた午前六時關門を西へと出帆した昨日に變る今日の晴天、波

穏やかに幾多の汽船、幾千の帆船、西に進むあり東に向ふあり須磨  
 舞子の絶景も手に取る如く明石灘を過ぎ屏風ヶ浦にさしかゝる、ま  
 るで屏風を併列した様な絶壁上に枝振りよき松樹が生ひて見るから  
 に海中に轉落せんとしてゐる。噫あの村には叔父が居る叔父は今頃  
 野良仕事か、何をして居るのだらうな濱邊に出で居やしないだらう  
 か若しか居るならハンカチーフでも振つて見るに叔父は居やしない  
 叔父は今日の此の出帆を知らないのだ仕方がない。仕方がないと諦  
 めたが自然と寂しさか襲つて来て甲板上に居たまらず船室の一隅に  
 潜り込んだ

九月十六日

御國を後に

東雲方に明けなんとする頃ころはい豊前の門司に出づ山は浮ぶが如く南  
 畫のそれによく似た静かな關門海峽を船は徐行しつゝいつしか玄海

に出での話しに聞いた玄海灘は鳥も通はぬ怖ろしいところ、そして激浪は、いつも甲板上を越すものと思つてゐたが、天候のよい加減で荒れてはゐないのだがそうではない山の様な浪は徐かに蜿蜒うねつて夢で見る高い所から低い所へ落ち行くやうな感じがする對馬も右にして十七日午前九時朝鮮の某地點に着一夜假泊して翌十八日午前五時半同地發黃海に出づ十九日の夜に入りて激浪となり甲板上を洗ひ初めた、南京虫襲來の避難所に當てた甲板上の用意の綱つな大きな輪の中で外套冠つて居が堪へられなくなつたので到頭退却した此時には餘程目的地に近づいてゐたと見へて船上一點の燈とももないこれは敵艦襲來の豫防策だと聞いた船室では雜談に耽つてゐるが、なんとなく寂しさが襲ふて來る只聞ゆるものは轟々と狂ふ怒濤の音のみであつた

九月二十日

嶗山灣に投錨

末明に上陸地點である嶗山灣に到着した早や幾多の汽船ありて戦艦掩護の下に續々上陸してゐる英汽船あり赤十字船あり十數隻の戦艦は陣形整然として嚴重なる警戒振を示してゐる、工兵隊鐵道隊は棧橋の築造トロック線の敷設倉庫の建築等に多忙を極めてゐる一時も早く上陸したいと思ふが命令が來ないらしい

九月二十二日

石歌庄上陸

我中隊は末明より上陸は開始され午後五時迄に全部の引下しを終つた石歌庄は脊に巨峰峻嶮を負ひ前に廣漠たる黃海を控へた芋畑内に點在せる一寒村である初めて異國の地を踏んだ私は言ひ知れぬ感情が湧き起るのだつた海邊の砂深い所に天幕を張つて其夜を明した明くれば二十三日戦地に於ける初行軍進むこと僅に一里王呵庄、村

落に近い芋畑内に露營の陣を張つて前進命令を待つことゝなつた二十四日滞在の午後私の任務である小隊長の食事の用意自分のものと共に飯盒で焚かなければならない、ところで一本の薪まきもない困つた事だと戰友某と二人で數町隔つた或村落に薪を求めんと尋ねたか『ムユームユ』と云つて斷られてしまつた。そこで困り果てた揚句戰友は一策を考へ出したが其方法は面白くなかつた芋畑の中に小高い松林があつた、あの松を二三本頂戴しやうと云ふが儘に其處に走つた、そして友は一握り位ひの松を二本切り倒した此の有様を眺めて居た支那人は駈け付けて來て怒鳴り付けて承知しないと云ひ出した友は黙つて居る失敗したのは仕方がないそこで私は友に代つて謝罪を漸やく許して呉れたので切り取つた松を貰つて歸つた初めて斯様な手を喰つた私等は非常に心持ち悪かつた其夕暮頃に中隊全員整

列し小林中隊長より嚴正なる陣中服務の訓示があつた。

九月二十五日

大上に露營

前進命令下る戰鬪準備怠りなく午前六時出發す河川に橋梁なく車道なく殆ど荒野を通行するが如き難路を十五珊溜彈砲は挽馬八頭に挽かれて行く馬も可愛想だが吾々徒歩手も時々砲車の綱引をせなければならぬ日暮れて大上に着す例に依つて馬材料の手入れを濟まして露營の陣を張り夕食の支度をなし後更に翌日の朝晝の二食分を用意して午後十一時天幕の下に潜る

九月廿六日

我飛行機飛ぶ

末明出發漂廣庄、北郭村、長村を経て正午には山東省第一の都市、即墨の南端にて同じ日に上陸せる英將バーナーヂストーン少將ひきの率ゆる歩軍を追越して中村に着す過ぎし此處彼處には散兵壕の跡あり



空には高く雁行の我陸軍飛行機あり即墨に位置して敵状偵察に行く  
あり歸るありて愈々交戦地帯の近きを示してゐた

身の疲れも死地と思はれ、さまで苦痛とも覺へず芋畑内の露營も  
數日を重ねて幾分經驗した枯草を寄せ集めて馬のそれの様に寢敷を  
作へ背囊枕に晝の疲れに一寢入りす、

九月二十七、八日

激 戦

急ぎ急いで正午泊沙河沿岸の流亭附近に至る昔物語の大井川の渡  
の様なもの私共徒歩者は裸となり己れの装具を一先づ向ふ岸へ持ち  
運び行き、引き返し様砲車の綱引と出掛けた重い砲車の渡川の終つ  
た後で己が裸を幸として清らかな流れを水風呂に當て、身體を奇麗  
に洗つた少しは吞氣に聞ゆるが此時の心持ちのよいことは格別だつ  
た服装を整へ駄足で追ひ着いた、渡川の最中に一大爆聲と共に黒煙

の昇騰するを見しことに就て小隊長より注意があつたそれは林檎畑  
内に敵は地雷火を布設せるを以て猥りに通路外に入つてはならない  
と申し渡された、此處まで來ると何となく四邊の整然として居る様  
が目について獨逸の租借地帯内であることが判然した歩を早めて丹  
山の林中に入つた行軍の體形中我觀測小隊は先頭と定まつてゐる其  
觀測車の後から小銃を擔いだ私共徒歩者は付き歩いて行く折しも命  
令一下「挺進用意續いて挺進班前へ」の嚴肅なる中隊長の號令、觀  
測小隊長以下挺進班（乗馬）は先發した石門山老虎山の山道を過ぎ  
行く頃には既に夜に入つてゐた進む處橋梁なく破壊されてゐて車輛  
の通行には一入困難を感ずるのである右に左に廻り、とある溪間に  
出でし時「止まれ」の號令ありて停車した、此時既に西南山麓に當  
つて敵彈頻りと曳火してゐる砲聲次第に加はる轟々として物凄し、

暫時中休すると空腹が襲つて来る晝前に飯盒を洗つてしまつて夜に入る迄歩き続けではとても辛抱が出来ない様に思ふ車長の聲飯盒の用意をせよとあつた、そこで観測車から飯盒を取り出して溪間の水に米洗ひして勝手なれた飯焚の用意に取掛つてゐた、時しもあれ、前進の命下る、取るものも取り敢へず飯盒を車輛に結び付けてしまつた私は、提燈の火を後向になしつゝ、最先頭に立つた時既に九月二十八日午前二時頃だつた漸やく東西を過ぎ季村附近に近づいた頃東白み行く敵は光弾探照燈を以て我陣營を照射してゐる今に夜が明くる彼様な所でぐづぐづして居ては全滅に遇はなければならぬ吉田小隊長は怒聲を張揚げて前の第四中隊彈藥車を激勵して居られる日本刀を振り翳してゐる武者振は一層の勇を湧き起すのであつた小さな橋を渡るや襲歩の令幕地に駈け出した私の携帯品全部観測車

に積込んでしまつてゐた観測車の後から引づられながら無心に走つたのである季村を越え河南東方の隘路に陣地進入する、私は観測器具である砲體鏡を脊負つた観測車は季村に引揚げてしまつた馭者の指ざした山を廻り道して頂上の観測所に登り着いた

先發の中隊長初め挺進班の一同に會し得たのである夜は全く明け放れて我歩軍の進撃が目睫し得る、右方膠洲灣には敵艦數隻が躍動間斷なく發砲してゐる天に聳ゆる堅塞イルチス砲臺又頻りと巨彈を送つてゐる軍の右翼に屬する我中隊は縦横より亂射を受く敵彈益々激しく前後左右に爆裂する轟々憂々耳を壓し頭上を掠むる飛彈の嘯聲強努の鏘聲の如く熱鐵の水中に投ずるが如く『ビーンシューーン』と響く我砲兵陣地危なしと見ゆ我共の居する観測所は高さ四五尺ある小松生ひ茂れる屈境の地である、私共は用意の土工器具を取出し

て觀測所掩壕を掘り出した小林中隊長は頭を出しては敵に發見されると頻りと戒めて居られる、砲體鏡に絶えず目をそゞぐ小隊長六番觀測手は目標發見に焦つてゐる丁度、午前七時過ぎ目標を發見せり中隊長の號令「目標……着發彈裝藥一合何千何百右より指命に打て」の嚴然たる號音通進手は受送話に懸命である我陣營より砲撃は開始された雨霰と降り來る敵彈の下、吾が歩軍は進撃を續けてゐる其の有様は蟻の匍へるが如く斜面に縦體形或は横體形、一步だに進む能はざるあり双眼鏡を手にして目標監視の任に就いた私は、膠洲灣の敵艦發砲の猛烈なる有様やら引切りなしに打出す敵砲臺に注視してゐた中隊長は時々敵艦發砲の模様を問はれる、我砲火蓋加はりし頃敵は退却し初めたそれ迄木蔭に隠れてゐた敵兵は身體を現はして逃げだした曳火彈の號令に逃ぐる敵兵頭上に巨彈が花火の如く炸

裂する我中隊の砲撃せし敵陣營は全滅せしと見ゆ、敵の前進陣地の沈黙を期して吾が歩軍は突撃に遷る發砲は停止された正午には敵の外防禦線を占領して大勝を得たのである此戰鬪を巫山より孤山に亘る戰鬪といふ。

### 吾重砲兵第三聯隊の殊勳

吾聯隊は重砲隊中先着して此の二十七八日巫山戰に参加し而かも正確なる射撃と迅速猛撃を加へたるは敵をして一大恐怖をして抱かしたので有て其偉大なる功績は自他共に認めてゐる就中左翼中隊である第六中隊は海岸線に陣營を定めたが故に敵艦の猛撃に遇ひ私の元班長であつた明石上等兵「當時第六中隊第一砲車長」は左手に重傷を負ひ私と同じ櫃の飯を食つた戰友多田信一君は敵彈命中し名譽の戰死を遂げ其他十數名の戰死者ありしと聞く吾が中隊では彈丸

雨下にあつて不思議にも輕傷者ありし而已私共の命と頼む火砲の此處彼處に彈恨を止めたりと雖も之れ又幸に操砲に支障なく私も無事だつた只私共と死生を共にする愛馬に死傷のあつた事は憐れにも不幸の極みである

度丁正午頃ひるだつた後方より送つて來て呉れた握り飯にぎを二個割與へられて食つた此時の味は忘れられない前日の時刻に食つたなりで働き續けである戦闘中はそれでも腹のすた事が判らないが一たび我れにかへると腹鳴するのが覺えるのだつた先づ初めて戦闘を體檢し得た私共はこれ程愉快なことはなかつた

九月二十九日

敵彈尙激し

河南に露營の設備をなし滞在することゝなつた吾軍は巫山孤山線に占據して本防禦線攻撃準備に着手された敵は吾軍の前進を阻止せ

んが爲に敵艦或は各要塞をり間斷なく巨彈を送る一日二千發餘か數ふるに至り我軍の損害少なくなかつた

十月一日

獨探の死刑

夜となく晝附なく彈聲轟々として絶えず遠く季村附近に落下するありて黒煙濛々と立昇るを見る然れども彈丸雨下に二三日をく經驗した私共は恐しくとも何の感じもなくなつた午前ひるまへだつた聯隊本部から獨探の死刑を執行するに依り曹長以上の者にて斬頭の任に當るべき志望者あらば申出でよとの通知ありそれを聞かれて居られた小林中隊長は『私は汚れた獨探の首を斬る様な及の持合せがない』といふ態度で居られた、私は流石中隊長だと首肯しゅこんせざるを得なかつたのである、彼れ憎むべき獨探は吾が露營地點を知りて山顛に立ち青島に向つて信號をなす、信號達すれば直に敵彈飛來集中する可愛い馬は

斃れる少なからぬ損害を與へられるのである、私は刑場に行きて八名の獨探死刑執行の有様を側で眺めて居た悪きを知れる彼等の覺悟のよいのには感心せざるを得なかつた

十月五日

愛馬の奮闘

私共は上陸以來二旬を露營に經驗した初めの裡は眠る事も出来なかつたが此頃では何等不自由を感じない様になつた然し可愛ゆうてならないのは愛馬である海上千里激しき動搖に悩まされ上陸後は休養の暇なく難路強行軍である天氣續きではあるが大陸氣候で晝は暑さを凌ぎ夜は脊に霜をうけるわけて砲彈に見舞れ戦々恟々として打震ふ様は憐はれなものである

斯様な中でも愛馬は戦争に理解あるか其忠實な働き振りには何人も感謝と同情をせないものはない噫可愛ゆき馬よ

十月十日

滞在中の任務

海軍重砲隊作業場助力の爲に毎日交代若干の兵員を派遣される或は兵器の手入をなして前進準備怠りなくなされてゐる、衛兵勤務も厩舎當番もない私には唯中隊長小隊長の身、の廻りや用達しをなして其日を送つてゐる露營地はやはり薯畑であつて間食には何不自由も感じない毎日々々焼薯の暖いのをバクツクことが出来る煙草も酒も呑まない私には酒保とは關係がない方である、中隊長や小隊長は毎日前進地方面に出張せらるゝか或は中隊にあつて何事か事務に多忙を極めて居られるのだつた

十月十三日

前進地向ふ

日の西山に傾く頃はひ住みなれし河南の露營地を後に戦友森田と唯二人四五日間の糧食を擔ふて前進觀測所に向つて出發した、道案

内は友である友は前日中隊長に隨行して一度往復をして居ると云ふので目的地はよく承知して居るものと思つて居た。河西を過ぎ行く頃は日は既に没してしまつた追々と進むにつれて友の態度が疑しく見え出した、道を間違へては居ないかと尋ねる友の返答の不得要領なのに困つた或る三叉道で右に行くべき筈のものを左へ行つてしまつて道を失ふてしまつたのである、それから諸所の作業場を尋ね廻れども『私の行く先は何處だ』と聞いてゐる様なもの一向判明しさうにもない、歩哨に誰何されて、うろたへながら尙も足を早めて小さな川添ひに進む夜は次第に更け行きて己が足音さへ氣に懸る友の面さへ見えぬ暗中をとぼくと進み行く平坦な所に出た時輕便鐵道の終點であるのに目がついた、これよりは進みもならず後戻りもならず二人は雜草中に座り込んでしまつた時計を取り出して見ると夜の十

二時も少し過ぎてゐたをして無言の儘に二三分經過したふと目についた燈火さほしひに氣を取り直してこれを便りに草を分けて進む、敵陣に入るか入らない位ひは想像出来るがそれでも不安に思つた火を便りに辿り着いて見ると此處は歩兵の炊事場であつた觀測所と尋ねて見ても知れさうにない仕方がない親切な小隊長や軍曹は中隊本部に電話して呉れたが判らない方法てだては盡きてしまつた、小隊長は私等二人に向ひ、今頃から探しても駄目だから今夜は此處で宿つて明日の朝早くから探すがよいといつて呉れた親切な軍曹は部下に命じて食事の用意をして呉れた目差めざしの乾物ほしもので温い御飯を頂戴した、この味は何に譬へやうもない心から感謝したとして勧められる儘に歩兵第五十六聯隊第二中隊の天套の下に潜る末だ寢もやらぬ戦友は巫山孤山戰當時の我重砲の偉力を賞讃したりしてそれからそれへと話しが盡き

ぬ親切な戦友の厚意を受くる我等は感謝するに言葉がなかつた夜は次第に更け行けど一眠りも出来ぬ心が、りは前進観測所である用意の食糧は私等二人の手にある、私等はこうしてゐるが、皆は如何にされて居るだらうと種々と想像しては矢も盾も堪へられない様になると眠るどころではない、只管夜の明るのを待つた朝飯を興へられ一同に別れを告げて漸やく午前七時前進観測所（大山、一二三高地）に到着した早や作業は着手されてゐたので直に交代した。

十月十五日

敵陣を望見

雨は頻りと降り出した観測所及其行通路屈開作業は晝夜兼行で續行してゐる、雨の小止みせる夕まぐれ作業の交代を得て外被を眞深に冠り、松間に伏し地圖と友に教へられて敵陣を望む怪魔の伏すど見ゆる堅要、イルチスビスマルク、モルトケ、の連山天に高く聳え

一大城壁をなし近くは海泊河を隔て、海岸堡壘あり台東鎮東堡壘、あり續いて中央堡壘、小湛山、同北等の諸堡壘あり左方海面に突出せる會性岬砲臺あり右方膠洲灣内には敵艦數隻ありて其防備の堅實なるを覚えしむ

十月十七日

雨と寒さに悩む

雨は降り續きて晝夜兼行作業に支障を來し唯一着の服も外被も濡れて外套一枚を餘す而已夫れでも作業中は寒さも左程感じないが一度交代されると身震ひする北風激しく夜は極寒の感じがする剩さへ飯を焚くにも薪は無く一日中堅パンをかちりて飢を凌いだ

十月十九日

敵艦自爆

夜の十時頃膠洲灣内に火焰の昇騰するを見る二隻の敵艦自ら火を放ち炎々と燃えて數時の後沈没したらしい井後小隊長と二人で此有

様を眺めてゐた

十月二十二日 空中戦

敵の單葉飛行機一機毎日數回我陣營上に出沒して悠々偵察を行ひ豪膽にも我砲火を冒して駈け狂ふ様は悽愴といはんよりは外に言葉なく吾飛行機も二臺或は三臺、雁行して躍進敵機を追撃するあり、又敵陣營上に毎日幾度となく駈け巡りて敵狀偵察を遺憾なくさるゝと見ゆ。

十月二十三日 作業の困難

此處に作業開始以來間斷なき敵砲火を排し晝夜兼行にて觀測所掩壕及行通壕屈開作業を續くる事十餘日此間豪雨に惱まされ寒風に吹き虚まれて工事は半ば作し得たが作業の進捗と共に困難を感ずるのは山頂一帶岩石層をなし十字鋏鶴嘴等の土工器具は破損して石工器具

も十分でないこの作業の困難は言葉に言ひ表はず事の出来ない位ひである夜は絶えず敵の光弾、探照燈の見舞を受け時々縮かまされた  
十月二十五日 濃霧ありて終日攻戦地帯を包み作業には至極都合のよい日であつた。

十月二十六日 吾海軍の援護砲撃

八月下旬以來激浪と鬪ひ風雨に洒され或は敵の夜襲を受け、困難なる封鎖と監視警戒任務に就ける加藤中將の率ゆる第二艦隊では一躍援護砲撃を開始した。イルチス、會性岬砲臺小堪山堡壘を熾に砲撃し初めた私は双眼鏡を手にして此實況を望見するに吾軍艦陣形整然として巨弾を送つてゐる其射撃頗る正確であつて一彈イルチス砲臺に命中した小隊長初め一同は命中々々と小躍りして喜んだ午後も射撃は繼續せられたが敵は一發の應射もなし得なかつた、薄暮には



敵兵十四五名出でて其の破損復舊工事をしてゐた。

十月二十九日

戦備漸やく整ふ

晝夜兼行で観測所の設備を急いで漸やく完成した吾砲兵陣地も總ての手順は運ばれ今か今かと命を待つものゝやうである、眼下に見ゆる、吾歩軍は猛烈な敵砲火を排し徐ろに敵陣に肉迫してゐる雨と寒風に悩まされ晝は身を壕に潜め夜は急いで壕を作り敵状を窺ひつゝ次第々々に前進して今は戦機刻々に迫るのを覺ゆるのである敵の砲撃益々急にして弾聲絶えず夜は光弾探照燈を照射して作業の防害を爲す、然れども我軍は九月二十九日以来敵の軍艦及敵飛行機に對し射撃するの外隱忍應射すること無く時機の至るを待つものゝ如し

十月三十一日

總攻撃開始

三十日の晝赤飯を焚いて天長節の御祝ひをしたそして總攻撃の命

のあるのを今か今かと待ちわびるのだつた夜に入つて間もなく大隊本部から戦闘準備完了獨立攻城重砲兵第四大隊（由良）缺と通告あり明くれば天長の佳節曉雲方に霽れ行く頃ほひ、命令一下、總攻撃は開始された、重砲野砲の凡そ百數十門より同時に火蓋は切られた、何千何百といふ、彈丸は敵堡壘砲臺に爆裂する、其彈聲轟々として天を翻し地を敷さんばかり砲煙濛々と立昇りて青島市街も今は火燄に包まれてしまつた、我中隊も等しく砲撃は開始され先づ堅要ピスマルク北砲臺に試射を終へ續いて中央堡壘、臺東鎮、同東堡壘、仲家窪堡壘等の試射を完了した、そして臺東鎮堡壘に猛撃を續け三百餘彈を送つて敵砲に命中全滅せしめた、午前八時といふに大港沿岸に巨體を露出せる米領石油タンクが轟然爆音と共に火を發し悉ち火焰濛々として天を蔽ひ蒼蔚たる煤煙晴天爲に雨中の如くなりぬ、我

砲撃は間斷なく彈聲次第に加はり轟々般々耳を聳せん計りであつた

十一月一日

敵沈黙を守る

正午には又亦英領石油庫に砲彈命中して火焰天に沖し其有様は形容に言葉なし夜に入れば敵はやはり光彈探照燈を以て我軍の進撃を妨害する一度敵探照燈の下に立つに至らんか何萬燭光ともあるべき爛々たる電光眼を眩にして前方を正視する能はず、絶へず機關銃砲にて敵は應射をする而已である我軍の夜間に於ける發砲は敵の發砲を阻止する程度に於てなされ一發だに無益の發砲はない、私は晝夜目標監視任務に服す。

十一月二日

我砲彈着々精巧

砲撃は日を追ふて益々激烈を加へさしも堅固な敵壘も今は破壊されしと見ゆ吾中隊の目標である中央堡壘では掩蓋飛揚し一つは彈藥室を破壊した。

十一月三日

徐々敵陣に肉迫

總攻撃開始以來我歩軍は躍進援護砲撃の下に急ぎ交通壕の屈開をなしつゝ進撃を続け今は早や喧噪叱咤の聲を聞き得る近距離敵陣を隔つる僅かに十米突乃至三十米突に肉迫せしと見え突撃の近き日にあるを覺えしむ。

十一月四日 我中隊の壕造砲撃と増援重砲隊我聯隊の編成になる獨立攻城重砲兵第四大隊由良では後れて嶗山灣に上陸なし巨砲二十八珊瑚彈砲を搬送し來り大山を距る後方二千米突孤山後なる水清溝村落附近に晝夜兼行を以て据付を了し發砲は開始された小湛山堡壘を初めとして諸堡壘砲臺に猛烈なる射撃を續くる事となつた打出す巨弾は頭上を掠め轟々呻を立てゝ飛び行き敵陣に爆烈する此有様を

見ては痛快くと叫ばざるを得ない。

我中隊も間斷なく射撃は續けられ臺東鎮東堡壘の鐵條網破壊をなし或は歩軍の突撃路の屈開壕造砲撃に遷り凡そ數百彈を送る、吾陣營を距る僅に千九百五十米突の近距離其射撃頗る正確であつてさしも堅固な敵陣も木端微塵となるであらうと思つた。

十一月五日

敵の應戰頗る急

敵とは一分時間に數十彈を發射する速射砲あり、一秒時間に數彈を吐き出す機關銃ありて敵の應射頗る急である彼我共に全力を揚げて戰つてゐる吾軍は後方に繫留氣球を昇騰せしめ敵狀を偵察なすものゝ如し。

十一月六日

惡戰苦闘

月皎々と照る六日の夜も更け渡つた敵は死物狂の應戰振りである

イルチヌ、ビスマルク、も會性岬も其他堡壘砲臺も今は連發射撃である其爆聲雷の如く豪雨の如く打ち出す光彈は別天地を展開する白晝を欺くが如く爛々たる紫青の電光あり、噫々凄中に美あり、美中に凄あり人をして啞然たらしめ恍然神脱せしむ嗚呼既に御國に捧げし此の命此身は如何にならんとも只進むる而已と苦き笑ひに此有様を熟祝してゐた。

十一月七日

青島遂に陥落

歩軍の突撃は今か今かと待ち兼ねる占領の報來らずもう今日だと觀測所で誰か言ひ出した夜の明るに間のある午前五時に大隊本部より中央堡壘占領の電話あり一同の面持ちが異つて俄に一増の緊張味を帯びる丁度夜の明け行く頃吾軍一齊に突撃し初めた、小湛山堡壘を占領續いて臺東鎮東堡壘占領とあり、中央堡壘を奪取せる第二

中央隊はイルチヌ砲臺に向つて突進する一つはビスマルク砲臺に面して陣形整然突撃せり此有様は手に取る様に見ゆる吾中隊は射程を延して臺東鎮市街附近に逃るゝ敵兵頭上に曳火彈を浴せる時しも天地も覆へらん計りの轟然たる大音響と共にビスマク南砲臺を自爆せりこれが合圖か敵の堡壘砲臺の悉くに白旗は掲げた發砲は中止される陷落の聲一たび傳ふるや吾陣營より飛出す兵士に其處彼處の山頂は人山を築いた萬歳くの聲絶えず暫時鳴も止まず躍り狂はん計りに喜び廻るのであつた、私等も知らず觀測所より飛出して共に萬歳を呼び續けた。

嗚呼難攻不落の堅砦も遂に我手に歸した而かも獨逸は租借以來十八年の永き月日に幾十億といふ巨費を投じて漸やく完全なる領域としたとして覇を東洋の中原に延さんとする野望も今は一懷の夢となり

り行かんとは是れ天なり命なり顧みれば八月十六日動員下令ありて其の夜深山火藥庫の歩哨に立つた時の氣分を思ひ浮べて轉た感慨無量である。

### 戦の後

十一月八日 午後水清溝村落に至り、獨立攻城重砲兵第四大隊に屬して従軍した安堂政次郎同清次郎兄弟を訪ね互に無事なりしを祝し合つた越えて十二日の朝の四房山の麓吾砲兵陣地に於ける兩陛下皇太子殿下の下し給へる御勅諭奉讀式に參列して午前十時より井後小隊長指揮の下に敵陣營を見學せんと出發す、ポンプ街を通り海岸堡壘に出で之れより、臺東鎮市街臺東鎮砲臺、同東堡壘中央砲臺小湛山北堡壘の各所を経廻りて小湛山堡壘の腦牆に立つた、無慘に破壊されて見る影も無く、日はイルチヌ山に傾き時折り吹く寒風に

一層の寂寞を感ずるのであつた外洋より大港沿岸に至る戦跡を隅なく探りて大山に歸る。

十一月十六日に青島入城式並に招魂祭をイルチス練兵場に舉行され翌十七日青島市街を見學した宵から降り續いた雨を排して住みなれし大山を後に臺東鎮市街に引遷つた、二十二日の夜中中央堡壘の外濠掩蔽部の歩哨に立つた。

初年兵教育係として二十五日朝十一名歸營の途につく嶗山小灣砂子口より薩摩丸に乗船午後五時出帆二十九日宇品より上陸夜行にて大阪に向ひ十一月三十日午後二時無事に深山本隊に歸つた (完)

大正十二年三月十三日印刷  
大正十二年三月十五日發行

非  
賣  
品

著者兼  
發行者

大阪府東成郡鶴橋町東小橋百三番地

紀本善治郎

印刷人

大阪市北區西野田大開町九四一ノ二

中井乙也

印刷者

大阪市北區西野田大開町九四一ノ二

博愛社印刷所

291  
372

大正十二年三月十五日發行  
大正十二年三月十三日印刷

東京  
大正十二年三月十五日發行  
大正十二年三月十三日印刷

終

